

自分は訴へる

著者	池田, 小一郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	168
ページ	142 - 143
発行年	1918-12-25
その他の言語のタイトル	自分は訴える
URL	http://hdl.handle.net/2298/6863

すずろごと

森 雅 男

ふるまゝにへだて心のいや深みなれを思はぬ日もまちりけり
このまゝに消^けなば消^けぬべきひとゝきの夜の心をいとほしむかも
大いなる人のすべての悲しみを我が心今抱けるごとし
何ものか我が身に近くあるごとき心地のみして夜道を歩く
快き火を抱きつゝまだも吾手をすりやます夜は更け行くに
とんとろん夜はとほほに小太鼓の音ひびくなりやみてまた鳴る
ふともものにおびねし如く仰ぎ見し時計の針は動かざりけり
江津の湖^{うみ}雨雲重く我が上におそひ來れどさざ波もなし
湖^{うみ}づたい堤を辿る心よりさびれて空は雨となりけり

自分ば訴へる

一三乙

池田小一郎

悲劇は人生の本質である。悲劇は安定である。悲劇は信實である。

悲劇は力である。悲劇は信仰である。悲劇は福音である。

喜劇すら悲劇である。樂天は自己瞞着である。弱者のみ「運命」を有す。

悲劇は絶對である。樂天は相對に過ぎぬ。

(八月二十六日。河内艦に殉難せる義兄を近松寺に葬るの日)

□呪はれたる我が畫筆

赤ばかりが強くない。ダリアばかりが花ではない。「單簡シンプルが強い。」とのみカンバスの上では許されぬ。

汝の胛膜中の自然は左程に單純か。單純化は繪でない、圖案である。模様である。寫實は繪でない、説明圖である、見取圖である。

固定は死滅それ自身である。破壊の爲の破壊は建設を意味せず

形シェイプは繪の骨格である然るに海月くらげの繪がウヨクしてゐる。

倣模と觀察とは二にして一にあらず。

眞の藝術に流行なし。藝術は個性を重んず。しかも氣まぐれに非ず。

『印象的』は氣まぐれの背合せである。

『病的』を好む病的なる汝の頭腦よ。

汝のキャンバスは平面である。跋者ちえんはである。啞おぼである。

典型的より脱して更に類型的に入らとす。